

て、日本の世界遺産登録第一号になりました。
が、見所は建物だけではありません。京都
のお寺が庭園で有名なのに対し、奈良の見ど
ころは何と云っても仏像です。釈迦三尊像、
百済観音像、薬師如来像、救世観音等、わが
国を代表する仏像が法隆寺に所蔵されていま
す。
聖徳太子は1986年までの日本の1万円
札に出ていた方ですので、外国人でもご存知
の方がいらっしゃるかも知れません。日本で
初めての法律や官位制度を作り、中国との外
交を進め、仏教を取り入れた政治をおこなっ
た人物です。
なお本日は朝日カルチャーセンター・朝日
JTB交流文化塾の受付奥のスペースで、斑
鳩町の観光PRブースを開設しております。観
光パンフレットのほか、斑鳩ブランドに認定
されているおいしい食べ物や、斑鳩らしいグ
ッズの販売もあわせて行っておりますので、
是非お立ち寄りください。

つています。

607年という年は、実は法隆寺の名前がその当時は「斑鳩寺（いかるがでら）」、斑鳩にあるお寺ということですが、そういう風に言われていましたが、その前年の606年には、既に「法隆寺、いわゆる斑鳩寺」ということは認識されていきました。というのは、推古天皇が、『勝鬘経義疏（しょうまんきょうぎしよ）』と『法華経義疏（ほっけきょうぎしよ）』の講演を聖徳太子に請われて、そのお布施料として、播磨国（現在の兵庫県）の水田1000町を頂戴したということになっております。

それを信じるならば、607年というのは、あくまでも完成したという感覚かなと思います。しかし、お父様の病氣平癒のために建てられたわけです。しかもそのときの本尊は、「薬師の像を造って仕えたい」というわけですから、紛れもなく「薬師像」でなければならぬわけですね。ところが、現在、みなさまが斑鳩へ来られて法隆寺を参拝されますと、

法	隆	寺	の	金	堂	の	ご	本	尊	は	お	釈	迦	様	で	す	。		
そ	こ	に	ひ	と	つ	食	い	違	い	が	起	こ	っ	て	く	る	わ	け	で
す	。																		
最	近	で	は	、	私	も	そ	う	だ	と	思	い	ま	す	が	、	6	7	0
年	(天	智	9	年)	に	法	隆										
寺	が	雷	に	よ	る	火	災	で	焼	け	て	、	そ	の	後	建	て	直	さ
れ	た	と	い	う	風	に	考	え	ら	れ									
て	い	る	わ	け	で	す	。	と	こ	ろ	が	そ	う	す	る	と	、	も	と
も	と	の	法	隆	寺	を	建	て	た	と									
き	に	、	お	父	さ	ん	の	用	明	天	皇	の	た	め	に	建	て	た	わ
け	で	す	か	ら	、	な	ぜ	薬	師	如									
来	を	祀	っ	て	あ	げ	な	か	っ	た	の	か	と	い	う	こ	と	に	な
る	わ	け	で	す	。	こ	れ	は	大	変									
大	き	な	問	題	で	、	薬	師	如	来	像	の	う	し	ろ	に	銘	文	が
刻	ま	れ	て	お	り	ま	し	て	、	お									
父	様	の	病	気	平	癒	の	た	め	に	推	古	天	皇	と	聖	徳	太	子
の	2	人	で	建	て	た	と	い	う	こ									
と	が	書	か	れ	て	い	ま	す	。										
[レ	ジ	ュ	メ	3	ペ	ー	ジ]	そ	こ	で	現	在	の	釈	迦	三	尊
像	の	光	背	銘	文	を	見	て	み	ま									

す	と	、	レ	ジ	ュ	メ	の	右	下	の	黒	い	部	分	は	光	背	銘	文	
の	写	真	で	す	が	、	こ	れ	の	文										
面	は	、	写	真	の	上	に	あ	る	漢	字	ば	か	り	が	並	ん	で	載	
っ	て	い	る	部	分	に	な	り	ま	す										
が	、	こ	れ	に	よ	る	と	、												
「	法	興	元	(が	ん)	三	十	一	年		歳	(ほ	し)	は	辛	
巳	(か	の	と	み	/	推	古	二											
十	九	年)	に	次	(や	ど)	る	十	二	月	に	鬼	前	太	后	(
聖	徳	太	子	の	母	、	間	人	皇	后)									
崩	(み	ま	か)	り	た	も	う		明	年	正	月	廿	二	日	。	上	
宮	法	皇	、	病	に	枕	し	て	食	を										
愈	(よ	ろ	こ)	ば	ず		王	后	(膳	妃	(か	し	わ	で	ひ)
)	労	疾	(ろ	う	し	つ)	を											
以	て	並	び	て	床	に	着	き	た	も	う		時	に	王	后	王	子	等	
ま	た	諸	臣	と	深	く	愁	毒	を											
懐	(い	だ)	き	て		共	相	(と	も)	に	願	を	発	(お	
こ)	す		仰	ぎ	て		三	宝	に										
依	り	当	(ま	さ)	に	釈	像	の	尺	寸	王	身	な	る	を	造	る	
べ	し		此	の	願	力	を	蒙	(こ										

う	む)	り	病	を	転	じ		寿	(い	の	ち)	を	延	ば	し	世
間	に	安	住	し	た	ま	わ	ん	こ	と									
を	」																		
こ	こ	で	一	度	区	切	り	ま	す	が	、	こ	れ	を	読	み	ま	す	と
西	暦	6	2	1	年	に	鬼	前	太										
后	、	「	鬼	前	太	后	」	と	い	い	ま	す	と	、	「	鬼	の	前	」
と	書	い	て	な	ん	と	恐	ろ	し	い									
と	思	い	ま	す	が	、	『	上	宮	聖	徳	法	王	帝	説	』	に	は	こ
れ	の	説	明	が	書	か	れ	て	お	り									
ま	す	。	そ	れ	に	よ	り	ま	す	と	、								
「	鬼	前	と	は	、	此	れ	神	な	り	。	～	中	略	～	故	に	神	前
皇	后	と	稱	(し	ょ	う)	す	な	り	。」							
	そ	の	よ	う	に	『	上	宮	聖	徳	法	王	帝	説	』	に	は	説	明
が	さ	れ	て	お	り	ま	す	。	つ	ま	り	、	「	鬼	」	と	い	う	の
は	実	は	「	神	」	な	の	で	す	。	で	す	か	ら	、	こ	れ	は	み
な	さ	ん	知	っ	て	お	ら	れ	る	方	も	い	ら	っ	し	ゃ	る	と	思
い	ま	す	が	、	昔	か	ら	い	ろ	い	ろ	な	歌	の	中	で	「	鬼	」

と	表	現	さ	れ	て	い	る	場	合	に	は	「	神	」	と	理	解	し	た
方	が	わ	か	り	や	す	い	場	合	が	あ	り	ま	す	。	古	い	こ	と
を	言	え	ば	、	あ	ま	り	良	い	こ	と	で	は	な	い	話	な	の	で
す	が	、	人	々	の	世	の	中	を	良	く	す	る	た	め	と	か	、	い
ろ	ん	な	目	的	の	た	め	に	、	生	贄	(い	け	に	え)	と	し
て	人	々	が	殺	さ	れ	た	り	す	る	わ	け	で	す	。	そ	の	よ	う
な	関	係	で	、	人	々	は	み	ん	な	を	守	る	た	め	に	亡	く	な
っ	て	い	る	わ	け	で	す	。	そ	の	よ	う	な	感	覚	が	あ	り	、
今	で	は	古	い	話	に	な	り	ま	す	が	、	軍	歌	に	「	握	れ	る
銃	(つ	つ)	に	君	は	な	お	国	を	護	る	の	心	か			
よ	」	「	わ	れ	は	銃	火	に	ま	だ	死	な	ず	」	「	君	は	護	
国	の	鬼	と	な	り	」	と	い	う	の	が	あ	っ	た	り	し	ま	す	
が	、	つ	ま	り	国	を	守	る	た	め	に	鬼	と	な	っ	た	の	だ	、
つ	ま	り	鬼	は	神	様	と	い	う	意	味	合	い	で	あ	り	ま	す	。
余	談	に	な	り	ま	し	た	が	、	そ	う	い	う	こ	と	で	、	「	鬼
前	太	后	」	と	は	、	鬼	の	前	、	い	わ	ば	神	前	皇	后	と	い
う	こ	と	で	、	聖	徳	太	子	の	お	母	さ	ん	、	穴	穂	部	間	人
皇	后	の	こ	と	で	あ	り	ま	す	。	そ	の	方	が	西	暦	6	2	1
年	に	こ	の	世	を	去	ら	れ	た	と	い	う	わ	け	で	す	。	1	2
月	2	1	日	と	い	う	こ	と	で	あ	り	ま	す	。					

そ	し	て	、	「	明	年	正	月	廿	二	日	上	宮	法	皇	、	病	に		
枕	し	て	食	を	愈	(よ	ろ	こ)	ば	ず	」	と	あ	り	ま	す	の	
で	、	1	2	月	2	1	日	と	い	う	年	末	に	お	母	さ	ん	が	亡	
く	な	っ	て	、	そ	れ	か	ら	1	か	月	ほ	ど	経	っ	た	翌	年	の	
1	月	2	2	日	に	聖	徳	太	子	さ	ん	が	ご	病	気	に	な	ら	れ	
た	と	い	う	こ	と	で	あ	り	ま	す	。									
そ	し	て	さ	ら	に	、	今	度	は	王	后	(膳	妃)	が	看	病		
疲	れ	で	病	に	倒	れ	ら	れ	て	、	床	に	就	か	れ	た	。	つ	ま	
り	、	聖	徳	太	子	御	夫	婦	で	床	に	就	か	れ	た	と	い	う	こ	
と	で	あ	り	ま	す	。														
そ	れ	か	ら	、	「	時	に	王	后	王	子	等		ま	た	諸	臣	と		
深	く	愁	毒	を	懐	き	て	」	と	い	う	こ	と	で	、	周	り	の	臣	
下	や	親	戚	の	人	た	ち	が	大	変	心	配	を	し	て	、	「	共	相	
(と	も)	に	願	を	発	す		三	宝	に	依	り	当	(ま	さ)	
に	釈	像	の	尺	寸	王	身	な	る	を	造	る	べ	し	」	と	い	う	こ	
と	で	、	み	ん	な	で	心	配	を	し	て	願	い	を	起	こ	し	て	、	
三	宝	(仏	・	法	・	僧)	に	頼	ろ	う	と	い	う	こ	と	で	す	。
そ	し	て	、	お	釈	迦	さ	ん	の	像	を	造	る	、	し	か	も	聖	徳	
太	子	さ	ん	の	寸	法	と	同	じ	像	を	造	る	と	い	う	こ	と	で	
す	。																			

つ	ま	り	、	私	ど	も	（	法	隆	寺	）	の	本	堂	に	あ	た	り	
ま	す	金	堂	に	祀	ら	れ	て	い	る	ご	本	尊	は	、				
聖	徳	太	子	様	と	同	じ	寸	法	で	造	ら	れ	て	い	る	と	い	
う	こ	と	に	な	り	ま	す	。	つ	ま	り	、	聖	徳	太	子	と	同	じ
寸	法	の	像	を	造	っ	て	こ	れ	を	お	祀	り	し	、	み	ん	な	の
願	力	に	よ	っ	て	病	を	転	じ	て	命	を	延	ば	し	た	い	。	し
か	も	、	こ	の	世	に	長	く	と	ど	ま	っ	て	ほ	し	い	と	い	う
願	い	を	起	こ	し	た	わ	け	で	す	。								
こ	の	中	で	非	常	に	重	要	な	こ	と	が	あ	り	ま	す	。	と	
い	う	の	は	、	法	隆	寺	の	金	堂	の	場	合	も	、	や	は	り	聖
徳	太	子	さ	ん	の	病	気	平	癒	の	た	め	に	ス	タ	ー	ト	し	て
い	る	わ	け	で	す	。	い	ろ	い	ろ	調	べ	ま	す	と	、	飛	鳥	時
代	の	仏	教	と	い	う	の	は	、	実	は	、	ほ	と	ん	ど	飛	鳥	時
代	の	終	わ	り	の	頃	、	つ	ま	り	遣	隋	使	や	遣	唐	使	が	中
国	で	学	ん	で	帰	っ	て	き	て	、	中	国	の	新	し	い	宗	教	・
新	し	い	思	想	を	持	ち	帰	っ	て	き	て	、	広	め	て	い	っ	た
の	で	す	。	中	国	か	ら	持	ち	帰	っ	て	き	た	こ	と	を	理	解
で	き	る	の	は	、	だ	い	た	い	奈	良	時	代	の	早	い	時	期	く
ら	い	か	ら	後	の	こ	と	な	の	で	す	。	聖	徳	太	子	さ	ん	が
亡	く	な	っ	た	の	は	6	2	2	年	で	す	か	ら	、	こ	の	こ	ろ

に 仏 教 が ど の よ う な 信 仰 を さ れ て い た の か と
い う こ と で す 。
こ れ に は い ろ い ろ ご ざ い ま す が 、 中 国 か ら
朝 鮮 半 島 を 経 て 仏 教 が 日 本 に 伝 わ っ て ま い り
ま す 。 公 伝 と い う も の が あ り ま し て 、 公 に 仏
教 が 日 本 に 伝 わ っ た と さ れ る の は 5 3 8 年 と
い う の が 有 力 な 説 で あ り ま す 。
一 説 に は 5 5 2 年 。 ど う し て そ う い っ た こ
と が 起 こ っ た か と い う と 、 継 体 (け い た い)
天 皇 か ら 敏 達 (び た つ) 天 皇 ま で の 方 々 の 在
年 数 が 全 く 異 な っ て い る 資 料 が あ る わ け で す 。
同 時 に 欽 明 天 皇 が 即 位 さ れ て か ら 国 を 治 め る
間 の 年 数 が 全 く 違 う わ け で す 。 先 ほ ど 引 用 し
ま し た 、
『 上 宮 聖 徳 法 王 帝 説 』 や 、 元 の 飛 鳥 寺 で あ
る 元 興 寺 の 縁 起 に よ る と 、 『 日 本 書 紀 』 と 記
述 が 全 く 違 っ て い る わ け で す 。 な ぜ 『 日 本 書
紀 』 と 縁 起 な ど と の 記 述 が 違 っ て い る の か と
い う こ と で す が 、 記 述 が 違 っ て い て も 、 書 き
直 さ れ て い て も 仕 方 の な い こ と な の で す 。

みなさんもよくご存じのように、正史とい
うのは必ずある特定の人や特定の一族を持ち
上げるために作っている部分があります。
ですから、継体天皇から後に続く天皇に至
るまでの間に、ややこしいことがあれば、少
し付度して都合の良いように修正している部
分があるというのが一つあります。
もう一つは、さまざまな伝承・言い伝えと
いったものは、みんなから聴取して、それを
当時は年号で書かずに干支で書かれているわ
けです。そうすると、年数的なことというど
同じ年号が2回くらいは出てくるわけです。
また並べ間違ひも起こります。
さらに、そういう伝承よりも、歴史書な
どを編むために集められた伝承というのがあ
るわけですが、それらが随所に何箇所か出て
まいります。
例えば『日本書紀』だけではなく、ほかの
書物にも同じような記事が出てきたりいたし
ます。伝承から書物となって出来上がるまで

にかなり時間が経っているということ
です。現在、明治150年にあたりますが、明
治の歴史ですらぐらぐら動いているわけです。
そうすると、『日本書紀』が編まれたときに、
飛鳥時代や、それよりも古い時代の歴史とい
うものは一体どうなるのかというわけです。
かといってそれをないがしろにしてよいの
かというのと、資料がないのでどうしようもな
いわけです。そういう事情があるため、「
そういうことがあったのだろう」という程度
に考えておいた方がいいのかなと思います。
仏教が538年に日本に伝わったとします
と、その仏教は一体どんなものだったのかと
いうことになるわけです。これは中央アジア
から中国に入るときに例がありますが、自分
たちが普段信仰している・信じている神様の
考え方と全く同じあるいはよく似た神様が祀
られていて、しかもその神様が隣の国の神様
あるいは他の国の神様、あるいは仏（ほとけ）
というところの神様、例えば『日本書紀』に

も書かれている、「蕃神（ばんしん）＝隣の
国の神様」「仏神＝仏（ほとけ）という神様」
「他神＝ほかの国の神様」というのが入って
きたという感覚なのです。中国でも例がある
と申しましたが、中国でも初期の頃に
は、モンゴル高原から中央アジアにかけて
暮らしている胡族の神様である「胡神」、それ
から「えびす＝西の方の人々が信仰している
神様」「じゅうしん」、あるいは『日本書紀』
と同じ「仏神」といったものが出てまいりま
す。
いずれにしても、自分たちが日ごろ信仰し
ている神様と大して変りのない、しかし急に
隣の国の神様を祀っていたら天つ神・国つ神
はお怒りになるだろうということで、みんな
が反対をするわけです。しかしそこで賛成し
たのが、蘇我稲目という人です。その賛成に
天皇陛下は困られて、賛成した人に「それを
祀りなさい」と言っていて、蘇我稲目は喜んで仏
様を持ち帰って、「向原（むくはら）の

家を祓い清め寺とす」と書いてありますが、
「祓い清める」というところに、昔からの日本
のしきたりを踏襲しているわけですね。さら
に今度は、その仏に仕える3人を選び出しま
す。この3人は「三綱」尼と言って女性です。
一番上の人は11歳。昔からよく言われてい
ることですが、いわゆる神様に仕える巫女さ
ん的な認識であっただろうということですね。
ところが、それからどんどん仏教がひろまっ
ていきますと、徐々に変化してまいります。
そして、聖徳太子さんは特殊な事情があって、
皇族でありながら蘇我氏を中心とする渡来系
の人々と非常に仲が良かった。そして渡来人
が信仰していたのが仏教で、しかも菩薩思想
というもののなのです。その菩薩思想とは、だ
れ一人として漏れることなく仏像を乗ずるこ
とができるという考え方です。そうすれば、
今までの日本の国で先祖方がお詣りしてい
た神様、あらゆる山や川をお祀りし、ご先祖
方を大切にし、大地の恵み、あるいは大地の

脅	威	を	共	有	し	な	が	ら	、	し	か	も	こ	の	限	ら	れ	た		
狭	い	地	域	で	多	く	の	人	々	が	生	き	て	い	く	た	め	に	、	
譲	り	合	い	、	助	け	合	い	、	労	り	合	う	、	思	い	合	う	、	
と	い	っ	た	心	が	育	ま	れ	て	き	た	わ	け	で	す	。	そ	れ	を	
き	れ	い	な	形	で	行	っ	て	い	き	た	い	と	い	う	こ	と	を	願	
い	続	け	て	い	く	こ	と	が	皇	族	の	仕	事	な	の	で	す	。		
そ	う	い	う	風	に	考	え	ま	す	と	、	そ	れ	ぞ	れ	の	み	ん		
な	の	願	い	、	考	え	方	が	、	大	乗	仏	教	の	菩	薩	思	想	と	、
今	ま	で	私	た	ち	日	本	人	が	ず	っ	と	長	い	間	培	っ	て	き	
た	、	ご	先	祖	か	ら	引	き	継	い	で	来	た	も	の	の	考	え	方	
が	、	聖	徳	太	子	様	の	頭	の	中	で	き	れ	い	に	結	び	つ	い	
て	い	る	の	で	す	。	そ	し	て	、	聖	徳	太	子	と	い	う	ひ	と	
り	の	人	格	を	通	じ	て	、	仏	教	が	理	解	さ	れ	て	い	く	わ	
け	で	す	。	で	す	か	ら	、	よ	く	言	わ	れ	る	よ	う	に	、	例	
え	ば	「	何	々	教	」	を	み	た	と	き	に	、	そ	の	経	典	が	見	
つ	か	り	、	「	解	釈	が	全	く	違	う	で	は	な	い	か	」	と	い	
う	こ	と	が	起	こ	り	ま	す	が	、	起	こ	っ	て	当	た	り	前	な	
の	で	す	。	な	ぜ	か	と	い	う	と	、	日	本	人	の	心	で	新	し	
く	外	国	か	ら	入	っ	て	き	た	も	の	を	見	て	い	る	か	ら	な	
の	で	す	。																	

そして続きを読んでもみますと、

「若し是れ定業にして以て世に背きたまわば往きて浄土に登り早く妙果に登らせたたまわんことを」

もしかして、世の定めであって、みんなの願いに相反して、この後が大事なのですが、「往きて浄土に登り」と書いてありますが、大変奇妙だと思いませんか。みなさま方の認識では浄土は登るところでしょうか。普通であれば「往生」ですが、ここでは「浄土に登る」と書いてあります。また、「浄土」という言葉が金石文として一番古いのは、この文章なのです。この「浄土に登る」ですが、どの経典を見ても、仏様の国土というものは必ず水平線上です。阿弥陀さんの浄土にしても、水平線上の西方十万億土という、とてつもなく遠いところにいらっしゃるという風になっています。我々は、阿弥陀経にも書いてあるので、理屈上はそう思っています。しかし、

「仏さんの国ってどこにありますか。」と聞かれ
ると、みんなは心の中は、水平線上にある
とは思っていません。みんな上を見ているわ
けです。もう既にその段階では、インドで興
った仏教とは違うわけです。日本人が理解
している仏教なわけです。だから、その当時
の日本人が考えているような神様であったり、
高天原（たかあまはら）、あるいはインドの神
々も含めて、日本人は、神の世界というの
上にあると理解しています。
ですから、仏に対する認識はかなり違いま
す。
続きですが、
「二月廿一日癸酉 王后即世したまい」
つまり、622年の2月に聖徳太子の奥さ
んが先に亡くなった。
「翌日法皇登遐（とうか）したもう」

さて、先ほどお読みしました、「釈像の
尺寸の王身」、つまり聖徳太子様の等身の像を
造ろうと願いを起こしたわけですが、どこま
でできたかは別問題として、「釈像の尺寸の
王身」を造ろうと発願した時点では、まだ聖
徳太子様は生きているわけですから。つまり聖徳
太子様が病気で倒れられたけれども亡くなら
れていない段階から、「釈像の尺寸の王身」
を造ろうと計画を立てて、おそらくその計画
がスタートを切っていたと思います。しかも
お釈迦さんを造って、聖徳太子さんと寸法を
同じにして、生きている人のために造っている
。こういう例が外にあるのかなのかとい
うことが、私たちにあって一つ大きな問題な
のです。
こうした例は、実はあります。中国の北魏
の王朝のとき、文成帝という人が、雲崗の石
窟、あるいはその前にお寺を建てているので
すが、五帝を供養するためにお寺を建てたと
いうことです。五帝というのは、北魏の王朝

の最初とされており、道武帝、明元帝、
太武帝、その次は皇太子で亡くなられた文成
帝のお父さんにあたります「晃（こう）」
という名前で、のちに景穆帝とよばれた人
物、それから文成帝です。
文成帝は生きながら、お釈迦さんの像を自
分の供養のために造っています。こうした考
え方が、聖徳太子さんの頃に伝わっていたと
いうことです。そして同時に、みなさんよく
ご存じの、小野妹子が607年に遣隋使とし
て派遣されましたが、その時のことで皆さん
思い浮かべるのが、「日出ずる処の天子 日
没する処の天子・・・」という文言です。こ
れは、戦前からある意味政治的に利用されま
した。本当はそういうことは書いていません。
その文言の前に書いてあることとして、
中国の北魏と北周で大きな廃仏運動が起こ
ります。そのあと復興した
のが隋の文帝なのです。隋の文帝のことを
知っていて、遣隋使を送り込んでいるわけで

す。

ですから『随書』の「大業三年」というところには、「海西の菩薩天子」と出てきますが、これが文帝のことです。

続きに「重ねて佛法を興すと」と出てきます。2回廃仏されているためです。その廃仏されていることをちゃんと知っていたわけです。しかも文帝が建てたお城「大興城（だいこうじょう）」、建てたお寺が「大興善寺（だいこうぜんじ）」です。ですから、その当時のものの考え方が伝わっていたわけですが、ただし思想ではありません。

そして、（金堂釈迦三蔵像光背銘を）続けて読みますと、聖徳太子さんが亡くなって、

「癸未年（推古三十一年／623年）の三月の中に願の如く敬（つつし）みて釈迦の尊像並びに狹侍（きょうじ／わきじ）及び莊

広めて、

「遂に彼岸を共にし」

三宝を広めて、仏教の修業をして、ついに
悟りに至りたい。

そして、そこから先が大事なのです。宗教
的なことですが、これは623年に書かれて
いるということ、こういうものの考え方を
していたということ。しかも、聖徳太子
さんが生きていて書いたのであれば「三経義
疏」や「十七条憲法」と比較することはあり
うる話ですが、実は聖徳太子さんではない。
このとき聖徳太子さんは病気になるまで死にか
けておられるわけですから。そういう人が書
くわけがない。

では、いったいだれが書いたのかというこ
とですが、よく恵慈法師と言われますが、恵
慈法師は615年に帰国しているわけです。
そういうことを勘案して、この当時、聖徳太

子	さ	ん	と	い	う	よ	う	な	特	殊	な	人	以	外	で	も	、	聖	徳	
太	子	さ	ん	の	周	辺	の	中	に	こ	れ	だ	け	の	文	章	を	考	え	
る	人	が	い	た	と	い	う	こ	と	で	す	。								
		続	い	て	読	み	ま	す	と	、										
		「	普	遍	の	六	道		法	界	の	含	識	も	」					
		普	遍	の	六	道	、	法	界	、	含	識	と	は	誰	の	こ	と	で	し
よ	う	。	私	た	ち	み	ん	な	の	こ	と	で	す	。	六	道	と	は	「	
地	獄	」	「	餓	鬼	」	「	畜	生	」	「	修	羅	」	「	人	間	」	「	
天	」	で	、	そ	う	い	う	と	こ	ろ	の	世	界	に	迷	っ	て	い	る	
人	た	ち	も	含	め	て	で	す	。											
		「	苦	縁	を	脱	す	る	こ	と	を	得	て	」						
		迷	い	、	苦	し	む	世	界	か	ら	解	放	さ	れ	て	「	同	じ	く
菩	提	に	趣	か	ん	こ	と	を	」											
		こ	こ	に	書	か	れ	て	い	る	こ	と	は	、	完	全	な	私	た	ち
の	理	想	的	な	菩	薩	思	想	で	す	。									

です。から、止利仏師によって造られたとい
うことです。
仏像の光背銘について、古いときの仏像で、
作者がわかっているものは非常に少ないので
す。この金堂釈迦三尊像光背銘には、はっき
りと止利仏師と書かれています。そして同時
に、例えば仏像を造っても、お寺に大きな仏
像が造られても、その目的と仏像を造られた
人というのは歴史でもよく出てきます。光背
銘の作者はなかなか出てこないのです。
もう一つ、金堂釈迦三尊像光背銘とほぼ同
じころのものだと言われている、「天寿国繡
帳（てんじゅこくしゅうちょう）」というもの
があります。中宮寺が所蔵しているものです。
その「天寿国繡帳（てんじゅこくしゅうちよ
う）」ですが、みなさんの手元には資料があり
ませんが、これを読んでみますと、簡単に言
うと、ほとんど前の方は、橘郎女（たちばな
のいらつめ）が推古天皇とどういう関係かと
いったことを、昔の呼び名で書かれています。

置き字なので、「宇」を置き字と考えて読ま
ずに「寿国」という人もいます。
しかしながら、一般的には「天寿国」と呼
ばれています。これはおそらく、「天」に「
月」や「太陽」といったものを表しています。
「太陽」は、三本足の鳥を表しています。「
月」は「うさぎ」と「かえる」を表している
ようです。これは中国の神仙思想（しんせん
しそう）からきています。
ですから、「浄土に登る」の「浄土」に対
する考え方はというのは、実はこの段階では
無茶苦茶。神様の世界なのか、仏教でいうと
ころの「天」なのか、神仙思想の「天」なの
か、いろいろな考え方があります。いずれに
しても、漠然とこのように考えられてきたと
いうことです。
そして、
「而（しか）るに彼（か）の国之形は。眼
（まなこ）に看（み）叵（がた）き所なり。」

	天	寿	国	と	い	う	国	の	形	は	、	ど	ん	な	な	の	か	想	像	
	が	つ	か	な	い	。														
		「	稀	(ね	が)	は	く	ば	圖	像	(ず	ぞ	う)	に	因	り
	て	。	大	王	の	往	生	し	た	ま	え	る	状	(さ	ま)	を	觀	ん
	と	欲	(お	も)	う	と	。」											
		旦	那	様	が	、	今	ど	う	し	て	お	ら	れ	る	の	か	、	図	像
	で	描	い	た	も	の	を	見	て	眺	め	て	、	思	っ	て	い	た	い	。
		「	天	皇	之	を	聞	こ	し	め	て	悽	然	(せ	い	ぜ	ん)	た
	ま	ひ	て	告	日	(の	り)	た	ま	わ	く	。」						
		そ	れ	を	聞	か	れ	た	推	古	天	皇	は	、	非	常	に	心	打	た
	れ	た	。																	
		「	一	(ひ	と	り)	の	我	が	子	有	り	啓	(も	う)	す
	所	。	誠	に	以	て	然	か	爲	(な)	す	と	。」					
		そ	の	通	り	で	あ	る	。											

帳は、どうやら途中で作り直されています。

またそこに書いてある文字は、おそらく古いものを使ったのだろうと考える人と、新たにつくったのだろうと考える人と別れます。大まかに言えば、天寿国繡帳に書かれていることとを信頼する人と信頼しない人がいるということになります。

いづれにしても、ごく限られたこの時期だけ、製作者がわかるということになります。

これについては事実であろうと私も思います。

それから、薬師如来像は、斑鳩宮が焼けたときに一緒に焼けたのだろうというふうに思っているわけですが、薬師如来の銘文だけは古いものを踏襲して書かれているものだろうと考えられています。これらが大きな問題の一つとして考えておいていただきたいと思います。

それからもう一つは、先ほど「法皇」という名前を頭に置いておいてくださいと申しましたが、「法皇」が釈迦三尊像の光背の銘文

に出てくるといふことでは、なかなか「法皇」という名前を付けられることは少ないのですが、聖徳太子は古くから「法皇」という呼び方をされています。

[レジュメ4ページ]さらにもう一つ、薬師如来の銘文中にある文言ですが、非常に重要なのは、一番最後の行です。「東宮聖王」と書かれています。「東宮」というのは皆さんご存知のように、「皇太子」のことであり、その「東宮」という名前が使われたのはもっと後の時代のことだと言われておりますが、ところが「東宮」という言葉がもっと早く使われていたのではないかという人もいます。

さらに、時代がややこしくなっている時期に考えておかなければならないと思うのは、天皇陛下が退位されて、皇太子様が天皇陛下になられるといふことは皆さんご存知だと思います。ではその「天皇」という名前がいつ

また、最後のページでは、斑鳩のおいしい
お菓子や斑鳩ならではのグッズを選んだ斑鳩ブ
ランド商品の紹介をしています。
本日、朝日カルチャーセンター・朝日J T
B交流文化塾の受付奥のスペースで、斑鳩町
の観光PRブースを開設しております。観光パ
ンフレットのほか、斑鳩ブランドに認定され
ているおいしい食べ物や、斑鳩らしいグッズ
の販売もあわせて行っておりますので、是非
お立ち寄りください。
それではこれをもちまして、「法隆寺地域
の仏教建造物」世界文化遺産登録25周年記
念セミナー「聖徳太子のおもかげに会う斑鳩」
を終了いたします。
本日は、ご来場いただき、誠にありがとうございます
ございました。
出口でアンケートを回収させていただきますま
すので、ご協力いただきますようお願いいた
します。